

ぴえろプロジェクトとは

臨床発達心理士による被災地・避難所支援プロジェクトです！

2011年3月11日の大地震から始まった東北関東大震災は私たちの国にとって未曾有のものとなりました。私たち臨床発達心理士会は、子どもから高齢者まで生涯発達を支援するという使命のもとに、可能な限り被災された方々への支援を行うことを目指して、3月20日「臨床発達心理士・東日本震災支援対策本部」を発足させました。その後、災害危機対応支援特別委員会を立ち上げ、対応にあたっています。

災害地や避難者のニーズを把握し、長期的展望にたちつつ、できることからボランティアにより支援を行っていきます。避難所での養育者や子どもへの相談支援、保育的サービス、発達障害児への支援を中心に、ボランティアへの事前教育や資料提供なども行っていきます。

一般社団法人 臨床発達心理士認定運営機構 日本臨床発達心理士会

どうして“ぴえろプロジェクト”なの？

私たちの支援の心構えの 7つのキーワードの頭文字をとって、この活動を PIERROT PROJECT (ぴえろプロジェクト) としました。

P ace	平和のために
I ndependence	人々の自立心に
E ncourage	希望を与え
R esilience	自ら回復しようとする力を
R espect	尊重し
O bjective	長期的な目標に向かって
T eam support	チームで支援する



子どもたちの笑顔のために「ぴえろプロジェクト」は、やわらかい専門性をお届けします！

ぴえろプロジェクトは次のような場所で行っています！

埼玉支部：福島県双葉町避難者支援 加須市、いわき市、南相馬市など
→連絡先：金谷 saijacdp@gmail.com

JDDネットワークへの協力：福島県相馬市における支援
→連絡先：東 azuma@nozomic.org
富樫 kyoko-to@jcom.home.ne.jp

* 避難所等では保育支援、心の相談、ボランティア講座、転居先での専門相談機関の紹介などに応じます

心のこと、家族、子育て、子どもの発達など

ご心配がありましたら

臨床発達心理士にご相談ください。

【例えばこんなこと…】

- 落ち着きがなくなった
 - ぼんやりするようになった
 - 赤ちゃんがえりがみられる
 - 食欲がなくなった
 - 眠れなくなった
 - 音やゆれに敏感になった
 - キレやすくなった
 - 体の調子がわるくなった
- ・・・などなど

【障害のあるお子さんのことも…】

発達障害（*）など特別な配慮が必要な子どもたちに対しても、特性に応じた専門的な支援の相談に応じます。

- * 発達障害とは、知的な障害や身体的な障害のある子どもたちの他に、知能に遅れのない自閉症やアスペルガー障害、ADHD やLD（学習障害）の子どもたちを含めます。日本では子どもたちの約9%であると言われています。



臨床発達心理士とは？

臨床発達心理士（りんしょうはったつしんりし）は、子どもから高齢者まで、生涯発達を支えるパートナーです。

全国に、約3000人の臨床発達心理士がいます。

ぴえろプロジェクトとは？

東北関東大震災を機に私たちが立ち上げたプロジェクトです。ボランティアとして、被災地や避難所で生活する方々の支援を行います。

【問い合わせ先】

一般社団法人 **臨床発達心理士認定運営機構** **日本臨床発達心理士会**

email: shikaku@jocdp.jp FAX: 03-6304

URL: <http://www.jocdp.jp/>

〒160-0025 東京都新宿区西新宿 6-20-12 山口ビル8F

理解
しよう

災害にあった 子どもの心を 理解するために…



ぴえろプロジェクト

1. 災害を体験した子どもたちの感情

- 漠然とした不安
- 特定のものに対する恐怖感
- いらいら、抑うつ感、無力感、孤独感、不信感など

これらの感情を強く感じたり、全く感じなくなったりします。また、興奮しやすくなる子どももいれば、無反応や無表情になったりする子どももいます。

2. 災害を経験した子どもたちの行動

- 記憶が混乱する
- 忍耐力の低下、落ち着きのなさ、決断できなくなる、
- てきぱきできなくなる
- 食欲不振、不眠、悪夢
- 嘔吐・下痢、頭痛、腹痛、動悸、過呼吸
- 感覚が過敏になる(音やゆれに驚きやすくなる)
- 体の感覚の異常(ゆれている感じ、ちくちくする…)

これらの感情・行動は、大きな災害後に起こる正常な人間の反応です。

3. 赤ちゃんがえり

- 甘え、しがみつきの、指しゃぶり、おねしょ、夜泣き、しゃべらなくなる、どもる、赤ちゃんことば
- 空想に閉じこもる、ひきこもる、キレやすくなる、興奮しやすくなる
- 親に依存的になる、自己中心的になる

これらの「赤ちゃんがえり」は心の安全を取り戻そうとするための大切な反応です。一方で、平気を装ったり、いつもより明るくふるまう子どももいます。

4. 災害以前からあった日常のストレス

- 親やきょうだい、夫婦間の葛藤
- 地域との関係、疎外感、
- 勉強、進学、就職など

災害後の混乱が落ち着くと共に浮上してきます。以前よりも傷つきやすくなっているため、注意が必要です。



災害にあった 子どもの心を 支えるために…



びえろプロジェクト

1. 心の中のことを表現できるのには時間が必要

子どもはことばではなく、体の反応や行動などで表現します。自分の感情や考えを整理して話せるようになるには時間がかかります。ことばで言い聞かせるよりも、スキンシップや笑顔、声の調子など、ノンバーバルコミュニケーションで安心感を伝えてあげるとよいでしょう。

2. 子どもの声に耳を傾けるには

どんなに小さい子どもでも、一人の人間として尊重することからはじめます。どうしようもないのだと説得しようとしたり、がまんできないことを批判したりするのではなく、子どもの心がどのような感情に支配されているのかを想像し、ありのままに聞くようにします。

3. 自分の心の声にも耳を傾ける

そして自分自身もまた、どのような感情に支配されているのかを感じ取るようにします。子どもの否定的な感情に触発され、大人の方にも、どうしようもない怒りや悲しみが込み上げてきたり、混乱してしまったりすることがあると思います。災害後に虐待が増加すると言われるのは、親もまた、傷つきやすくなっているからです。家族や友人、相談員などに話を聞いてもらうようにし、一人で我慢しないことが肝要です。

4. 思春期の子どもたち

自分の心を簡単に大人に表現しません。これは自然な発達の状態です。親としては、耳を傾けたいと思っても、話してくれないことにいらいらするかもしれません。親が子どものためと思って助言することが、子どもの心を刺激し、関係が悪化することがあります。そのようなときは子どもが自分で自分の道を歩き始めていることを喜びましょう。親よりも、友人や親以外の大人との関係において自分を表現することが多いため、親はそっと見守る姿勢が大切です。

*この資料は、前川あさ美(1995)「災害にあった子どもの心とその援助者のためのマニュアル」(月刊学校教育相談 1995年5月号)に基づき著者の許可を得て改変したものです。